※ 文盲の使い

ある侍が、家来に角館までの手紙をたのんだ。字の読めない家来は、よく聞いてでかけたが、忘れてしまった。人に読んでもらうのも恥しいと思い思案した。よく見ると一八十と木が二つならんでいるからキツキだなと思った。それである家にいって、「一八十にキツキの家を知らないか」と聞いたがわからなかった。

一八十とかけば平ともよむし、下の方は木が二つ書いてあるから山林の林だから、ヒラリンとよむかも知れない、よし大きい声でさかんであるこうといい、「ヘイリン、一八十のキツキ、ボクボク」と、叫んであるいたが、そんな家がなかった。なおも叫んでいると、侍とあった。なにを叫んでいるときくので、手紙をたのまれて来たが、届ける家を忘れてしまった。聞くのも恥しいので思ったまま叫んでいたのだといった。侍は手紙をみて、これは平林とよむのだと教えたという。